地方農村における学習付き市民農園の概況と利用者のその後の意向

Overview of Allotment gardens with Lectures in Rural Areas and User Intentions

○鏡　平*　　内川　義行**

KAGAMI Taira,　UCHIKAWA Yoshiyuki

１．背景と目的

近年，地方の農村においても都市的生活者は多く存在し，例えば大都市圏から離れた長野県でも非農家率が 87.6%となっている。一方で，「農作物の栽培」は地方移住に関する需要の最上位に位置し，こうした要求は高まっている。現に，地方農村でも住民向けの市民農園は多く存在する。鏡ら[1)]は，長野県において農村住民向け市民農園[注1)]の実態を明らかにし，3 つの萌芽的事例を示した上で，学習付き農園の検討が必要であると指摘した。学習付き農園に関する研究は，三宅ら[2)]のように大都市圏を対象に行われてきたが，地方農村では，地元民や移住者など多様な利用者がいることや，学習後の意向が多様（ex.所有地で耕作，農地取得）であることが想定され，都市部と異なる学習が必要と考えられる。

そこで本研究では，まず地方農村における学習付き市民農園の概況を把握し，優良事例の調査によって学習の実態及び利用者の属性・意向を明らかにすることを目的とする。

２．研究方法

調査対象は鏡らが抽出した長野県内の農村住民向け市民農園（41 市町村 291 農園）とした。まず，2022 年度に農園担当者へヒアリングを行い，学習提供の有無と指導形態を把握した[注2)]。次に，学習付き市民農園のうち最も指導が充実していた箕輪町の事例について，2024 年度に，(1)農園担当者へのヒアリング・資料収集，(2)講座の参与観察（6～10 月），(3)利用者へのヒアリングを実施した。また，(4)町が実施した「次年度の意向調査アンケート」の結果を頂き，利用者の学習後の意向について分析を行った。

３．長野県における学習付き市民農園の概況

学習付き市民農園は，9 市町村に 53 農園存在していた（表 1）。指導形態は，A.農園利用者へ栽培指導が提供される場合と，B.市民農園の一部区画で農業塾を実施している場合（農園利用者向けでない），の 2 つに大きく分かれた。A については，1 年間の指導プログラムが組まれている「年間プログラム」，定期的に巡回する指導員に個別で相談を行う「個別指導」，年 1,2 回の栽培講習会が行われる「単発講習会」にさらに分類された。

指導が充実していると考えられた「年間プログラム」について，箕輪町の農園では年 7 回の講座を週末に開催し，毎回ほとんどの利用者が参加していた。学習後の発展の 1 つとして周辺に町民菜園（貸し農園）も存在する。安曇野市の農園では，プログラムはあるが平日に講習が行われ，参加者は毎回 2,3 組であった。そこで箕輪町「講座付き菜園」を最優良事例と判断し，詳細な調査を実施した。

表1. 調査対象農園で実施されていた指導形態
The teaching methods used in the surveyed gardens

指導形態		市町村数	農園数
A.農園利用者への栽培指導	年間プログラム	2	2
	個別指導	2	3
	単発講習会	3	46
B.農業塾（園内施設型）		2	2
合計		9	53

※信州大学大学院総合医理工学研究科 *Graduate School of Medicine, Science and Technology, Shinshu University*
※※信州大学学術研究院 *Academic Assembly, Shinshu University*　キーワード：市民農園，農村住民，農村振興

４．箕輪町「講座付き菜園」の実態

4-1. 講座内容

2024 年度の栽培講座のスケジュールと内容を示した（表 2)。講座では基礎的な野菜栽培の工程（畝づくり， 苗定植等）を指導していた。講座で使用する種苗や資材は各回で配布され， 配布込みで利用料は 4,000 円/年であった。また，利用期間は最大 2 年間である。

表2. 栽培講座のスケジュールと内容
Cultivation course schedule and contents

指導日	指導内容
5/11(土)	●畑準備(畝づくり ・マルチがけ)
5/25(土)	●支柱立て　●苗定植(トマト, ナス, レタス等)
6/15(土)	●ネット張り　●芽かき指導　●播種(ニンジン)
7/13(土)	●生育指導(追肥や防虫対策など)
8/17(土)	●生育指導(スイートコーンの片付け方など)
9/14(土)	●苗定植(白菜) ●播種(大根, ほうれん草, 小松菜)
10/12(土)	●生育指導　●畑の片付けについて

4-2. 指導方法・体制

栽培講座は,「説明→実演→実践→相談」の流れで行われていた。まず，講師がその回の指導内容について口頭で説明し， 次にモデル区画（実演用のお手本区画）で実演を行う。それを見た上で利用者は各区画で実践し，疑問点や困っていることを講師に相談する。

また，講師は周辺で農業を営む営農組合の組合員 3 名が担っており，毎年異なる組合員が選出される。2024 年度は有機農家 1 名が主な指導を行い， 他 2 名が補助を行っていた。

4-3. 利用者の属性と学習後の意向

利用者 17 組のうち，利用 1 年目が 15 組，2 年目が 2 組であった。また，地元民は 8 組，移住者は 8 組，移住希望者（町の体験住宅を 1 年間利用中）は 1 組で，近隣市町村の出身者 3 組は地元民として扱った。移住者のうち 2 組は 20 年以上前に移住していた。

利用者の次年度の意向について属性別に示した（図 1)。ただし，移住希望者は移住者に含めた。講座付き菜園 2 年目を希望する方が最も多く， 地元民 3 組， 移住者 6 組であり，町民菜園の利用も同時に希望する方が 1 組であった。また，地元民 3 組は各々の所有地で野菜づくり行う予定であり，移住者 1 組は家庭菜園ができる物件を探している。

５．考察

利用者は地元民と移住者の割合が同程度で， 学習後の意向は多様であった。次年度，町民菜園へ移行する方に対しては栽培指導のみで十分と考えられるが， 所有地等の農地で実践する場合， 栽培技術以外にも必要な学びがあると考える。また， 家庭菜園ができる物件を探す移住者に対しては， 空き家関連の部署と連携を行い， 支援していく必要があるだろう。

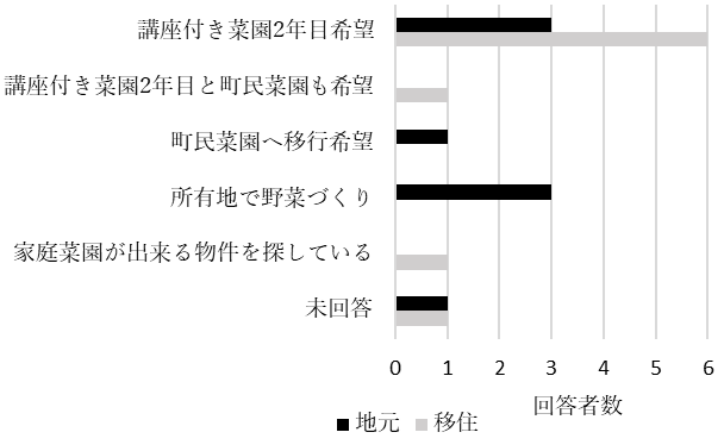

図 1. 次年度の意向（利用者の属性別）
User Intentions for the next fiscal year

【引用】1) 鏡・内川(2025)：長野県における農村住民向け市民農園の実態，農村計画学会論文集 5(1)，25-33
2) 三宅・松本(2002)：農業公園内に設置された市民農園の評価，農村計画論文集第 4 集，121-126

【注釈】注 1) 農村地域の定義を「大都市圏・都市圏に含まれない，且つ中核市の都市的地域でない地域」とし，長野市・松本市の都市的地域の農園は研究対象から除いた。
注 2) 安曇野市の 1 農園，大町市の 1 農園については 2021 年度に概況調査を実施した。